

今から六年まえの六月ごろのことである。といっても日本での話ではない、当時私はインド統計研究所に招かれて、四月末以来、カルカッタ郊外にある、この研究所の四階に居室をもって、華氏一一七度にもなった、物凄く暑い、インドの夏を単身で暮していた。はじめての外国生活で英会話は怪しい限りであった。研究所のなかに起居して、夕方七時すぎ、その周りの野原を散歩する以外に研究所のキャンパスを出ることもないという生活だった。日本人はほかに一人もいない。ついにはひとりごと英語でいうようになる、そういったところのことである。

この研究所の最大の仕事は、国民標本調査というインド開発の五カ年計画に関連する、大調査である。そこで首府ニュー・デリーにおいて中央政府との連絡にあたる役目の人物が必要なわけで、P・パント君というのが、計画委員会でネール首相の秘書役を兼ねてこの役に当たっていた。このパント君が、私の隣室に滞在し、二週間ほど毎日、三度の食事を共にすることとなった。インドの夕食は、九時ごろから始まるのがむしろ普通である。暑くて、さすがのインド人も寝苦しかったころであるし、私も会話をむしろ飢えていたことであろう。その上、パント君とは、何か話しの調子もあつたせいもある。

あるとき、夕食後何のきっかけかは忘れたが、日本映画「羅生門」がインドで非常な評判であったということから、しからば、この映画はいったい何をいおうとしているかという問題になった。パント君は、「一つの事実というものも、観方によっていろいろに解釈ができる」というのがテーマだという。なかなか高遠である。だがこの映画が、そういう哲学的な命題のためにあるだろうか。なるほど、観方によってそう解釈はできるかも知れない。しかし、芥川龍之助の「藪の中」を読んだときの第一印象としては、もっと人間の体臭の感ぜられることがらである。こういうことをいうと、日本ではどういう目に会おうか、空おそろしいが、「女性を信ずることができない」というのが、テーマのように思われる。ところが、パント君は、自分は、もちろん「藪の中」とかいふ小説は読んでいない。読んでいないがなぜ特に女性だけを信ずることができないというのが、テーマであるといえるか、京まち子たちのあの映画からは、そういう印象は得がたいと主張する。なるほど、同一事件に対して、盗人、妻、きこり、亡霊みないうことが違っている、もしそのいずれも同じように信じ、同じ程度に疑えば、パント君のいうようになるかも知れない。殺された夫、すなわち亡霊のいうことが、死人はいつわらずというので、それが真相のように私共が思っていたのに、私も内心気づいてきた。そこで、日本人は人の死するやその言はいつわらずという古くからの考えがあるのだから、いろいろ見方はあっても、亡夫のいうところが真実だと思う。そうだとすると、女性の動きにはまこと罪深いものがあるというのがテーマだということになる。こういう説明をするほ

かはないところまで誘導されてしまったのである。しかし彼が依然として、冷然かつ強硬に主張しているのには、あの映画に見られる限りでは、死霊の言うところに、格外の権威が与えられているとも思えない。君は小説を読んだときの第一印象というけれども、いったいそれは何歳ぐらいのことであるかと質問してきた。こちらは、今の議論にさして関係ないことを聞くなとは思ったが、思い出してみれば高校生のころ、十七、八歳のころである。これを聞くと、論敵は、しめたという顔をしていわく、それでは男の嫉妬ということが、まだわかるまいと、いよいよ、自説が正しいように言う。

これだけの議論をするのに、なれない英会話ではなかなか骨のおれることである。数式や数字のようなものは万国共通でありがたいが、「羅生門」には通用しない。論客パント君の頑強な抗弁ぶり、仕事のうえでもよく知っている。延々二時間近くも、議論をたたかわして、彼を説服しなかったのは、おそらくは、私のへたな英会話のせいもあるが、今でも私は残念に思っている。しかし、彼の頑強な抵抗のお陰で、よろしからぬ命題をうちたてえなかったことは、終生、幸福とすべきことであろうか。

認識の相対性をもし主張するならば、ものは観方によるのだから、パントのような観方も、私のよう観方もどちらも認めなければならぬわけになる。だから、君は、私のいうことを否認するわけにはいかぬだろう、これが、議論のはての私の最後のせりふであったと記憶する。

パント君は、インド人にしては色白く、整った顔付は、白哲(はくせき)という感じである。あるとき、カルカッタの南郊をドライブしたが通り過ぎる建物をさして、この建物に三年いたとなげなくいう。この建物というのは、もとの牢獄である。それは独立運動のころのことをいうのである。夫人がその当時の同志であったこと、最初の会合のときから二人はすぐに相愛のなかになったこと、独立運動の苦難を共にしたことなどを、そののち一カ月ほど経って、ニュー・デリーの彼の家に厄介になったとき聞かされた。これを聞いてから、なるほど先日の議論は、まことに相手が悪かった。私が不利だったのも当然だったと、思い知った次第である。

この夫婦に二児がある。長男はことのほか私に親んだので、汎戸東一君という日本名を謹呈しておいた。大きくなったら、外交官になれかしと、父君はいつていた。東一君が外交官になって日本に駐在することがあったら、日本人のもの見方も、父君よりもっとわかるだろうと、私は遠い将来に、はかないが、希望をもっているのである。

科学の進歩と人類の幸福

(一)

宗教も、芸術も、いずれも、人類の幸福に寄与するものであろうが、しかし科学の進歩こそ、そ